氷釈の章　尾池和夫選　2024年3月号

霞袂集

闇へ朝しんしんと押す霜のこゑ　尾池葉子
休みつつ歩む杖なり冬木の芽　大島幸男
髭すこし伸びたる心地焚火果つ　長野眞久
鯛焼の生きてをるぞと持ち帰る　原　稔
風呂吹や古びし椀の輪島塗　余米重則
うたた寝の母やはらかし枇杷の花　大口彰子

氷凌集

咳き込めば母のいたはり襖越し　重富國宏
風神の袋の破れ空つ風　遠藤長代
角刈りの生垣朝の霜の艶　佐藤美智子
干菜吊る上州の風いただきて　益子桂子
糖度計のぴぴとよき音冬りんご　真下章子
冬鷺の蓑毛乱れてゐたりけり　城島千鶴

氷釈の章　尾池和夫選　2024年2月号

霞袂集

水を出て石を動かず穴惑　尾池葉子
刈株のしひなに風の冬めきぬ　大島幸男
百三十七億年後の花八つ手　長野眞久
初霜や僅かに膨れローム層　余米重則
日没の光の名残石蕗の花　四宮陽一
冬空へクレーン迫る造船所　大口彰子

氷凌集

山裾の日を拾ふごと冬わらび　西村みゑ子
外つ国を右隻の流転金屏風　羽鳥正子
石けりの石の飛びすぎ石蕗の花　佐藤美智子
柚子は黄に水尾の里の御陵道　重富國宏
明日伐ると決めてしみじみ散紅葉　渋谷啓子
岳はまだ岩に日のある夕紅葉　遠藤長代

氷釈の章　尾池和夫選　2024年1月号

霞袂集

らしからぬ粒立つ雨に火恋し　尾池葉子
秋深しジビエの店に鹿の角　大島幸男
忌を修すこころに白き秋の薔薇　長野眞久
落人の村は湖底に水澄めり　原　稔
金木犀鯖街道ははや闇に　四宮陽一
蓑虫のどれも短く風叩き　大口彰子

氷凌集

割るるまで鴉が落す鬼胡桃　渋谷啓子
引算に指貸してやる秋麗ら　羽鳥正子
氷河湖の藍の深まり鳥渡る　鴻坂佳子
空ラ元気出してもひとり夜食摂る　川内一浩
秋蝶に花々小さくなつて来て　佐藤美智子
新聞をきちんと畳み星月夜　服部喜美子